未来へのロードマップ

いま　2017年　2018　2019　2020年　2025年　2030年　みらい

ライフスタイル

現時点での課題

日常や何気ない暮らしを楽しむ余裕が欲しい

<ケース１>
親は仕事、子どもは学校や習い事で忙しく、家族が揃うことなく個々に過ごしがち。

<ケース２>
地域の人間関係が希薄になり、子どもたちは伝統文化や先人の知恵に触れる機会が少なくなった。

<ケース3>
世の中が便利になりすぎて、伝統（エコ）文化や先人の知恵が失われている。

ライフ＆ワークバランス志向の高まり

<ケース１>
生活（ライフ）と仕事（ワーク）のバランスを上手くとり、暮らしや地域活動に費やす時間を確保する。

<ケース２>
地域ではそこに伝わる文化や技術（エコ料理、保存食、修理）をエコライフの例として、後世に残すというモデル的な取組みがスタートしている。

<ケース3>
伝統文化や先人の知恵の大切さがわかってきた。

地域とのつながり再評価

<ケース１>
地域活動に参加することが当たりまえになる。

<ケース２>
若い人が地域に誇りを持ち、先人の知恵を後世に伝えたい気持ちが芽生えている。
人と人（若い人と高齢者）をつなぐ（マッチングする）仲介役の存在がある。

<ケース3>
地域では、子どもたちが高齢者から伝統文化や先人の知恵を教わっている。

豊かな人間関係とコミュニティの構築

<ケース１>
顔が見える関係、風通しの良い関係といった豊かな人間関係が構築されている。そのような地域コミュニティの中で、家庭、仕事、遊びといったライフアンドワークバランスのとれた生活が実現している。

<ケース２>
子どもたちは、身近にある自然や、地域を大切に思う大人と触れ合いながら成長し、地域に対する誇りを持っている。
高齢者は暮らしの知恵や技術を若い人に教え、若い人は高齢者ができない作業を代行するというような、支え合う関係がある。

<ケース３>
雨水や下水処理された再生利用水が、畑や打ち水に利用される。
毎日のゆったりした生活の中で、夕方には打ち水が定着している。

環境にやさしい消費行動がしたい

<ケース１>
消費は価格重視と品質重視の二極化がみられる。

<ケース２>
ネット通販の利用が増加し、モノの配達時に不在で宅配便の再配達が増えている。

エシカル消費の認知度向上

倫理的消費。地域の活性化や雇用なども含む、人や社会、環境に配慮した消費行動

<ケース１>
「エシカル消費」の認知度向上に伴い消費者の意識が変わりつつある。
購入時にはリメイクでき長く使える質の良いモノ、使い捨てでないリユースできるモノを選ぶ人が増えている。
お金はなるべく地域で循環させるという意識が高まる。

<ケース２>
宅配便の再配達による環境への影響（CO2排出量の増加）が認識される。

エシカル消費の普及・浸透

<ケース１>
スーパーに並ぶ商品には、背後のストーリー（どんな人が、どこで作ったかなど）が表示されるようになる。

<ケース２>
宅配便の初回受取りの動機付けと、再配達への追加料金の発生という流れが進んでいる。

全ての消費行動がエシカル消費へ

<ケース１>
消費行動から社会に貢献しようというエシカル消費の意識が定着し、フェアトレードなどの社会に良いモノを選んでいる。

開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す貿易の仕組み

<ケース２>
宅配便は、再配達を避けるため、コンビニなどで受け取っている。

環境にやさしい家に住み続けたい

古い家屋には、気密性が低くエネルギー効率が悪いものが多い。

永く住むことのできる住まいの再評価

新築ではなく中古物件をリフォームする人も現れ、実験的に古民家や空き家の”おためし断熱改修”が始まる（補助金？）。

質の高い家が普及・浸透

断熱改修は光熱水費が抑えられて、健康にも良いことが広まっている。
地元工務店や建設業者の修復・再生技術の習得が進んでいる。

質の高い住まいで、質の高い暮らしを送る

高断熱住宅の普及や、既築住宅の断熱改修が進み、住宅の省エネルギー化が図られている。

いま　　みらい

2017年　2018　2019　2020年　2025年　2030年

コミュニティ

現時点での課題

過密が進む都会や過疎が進む地域では、人と人とのつながりが薄れている。助け合いのある安心した暮らしがしたい

<ケース１>
　コミュニティのつながりが希薄になり、近隣住民の支え合う機能が低下している。

<ケース２>
　空き店舗が増えることにより、地域のにぎわいが分散し、さびれた印象となっている。

環境の良い集まる場と移動手段のある、安心した暮らしがしたい

<ケース１>
　暑い日、寒い日には家の空調をかけた部屋で個々に過ごしている。

<ケース２>
　公共交通機関は便数が少なく、買い物には車で出かけないといけない。

空き家・空き蔵・空き店舗の再利用

<ケース１>
　コミュニティの再生のため人が集まる場として、空き店舗などが断熱改修されるなどモデル的な取組みが始まっている。

<ケース２>
　平日は都市部で働き、週末は田舎でのんびりしたいという志向が広まっている。
　都会の人に島根の良さを知ってもらうための「都会でここに行けば島根に縁のある人に会える」という場所が設定され、そこで人と人がつながり、都会の人に口コミにより情報が伝わる仕組みができている。
　情報発信のリノベーション×コミュニティ冊子を発刊し、地域の価値創造と発信を進める。

リフォーム市場の拡大

<ケース１>
　修復・再生の実務者を講師とし、実地で技術者養成講座が開催される。地元の技術者が増えリフォームしたい人のニーズに対応できる制度が整っている。リフォーム市場が拡大し経済が地域で循環する。
　改修で出た廃材や家具は、リノベーションで再利用される。

古い建物の良さを活かしながら、新築時以上に性能を向上させたり、住まい手の好みのデザインや間取りに変えたりすることにより、中古住宅に「新たな付加価値」を生み出す手法

<ケース２>
　リフォームした空き家や空き蔵を利用して、二地域居住を勧める。
　例えば
　　都市部に住み週末は農村部で過ごす（県内）
　　都会の人に蔵として貸出・・・自分博物館
　　宝物疎開地

空き家・空き蔵・空き店舗を利用した地域のつながりの復活

<ケース１>
　空き店舗を断熱改修し居住性を高めたスペースがある。
そこではお年寄りが集まり、活躍の場がある。夕方には子供たちが集まり、先人の知恵（勉強、ものづくり、遊び、習字など）を学んでいる。
　人と人とを結びつける場としてのコミュニティ食堂では、近隣の畑で収穫された農産物で料理が提供され、集う人は食事と会話を楽しんでいる。

<ケース２>
　空き蔵が自分専用の蔵に生まれ変わることにより、使用者が都会から定期的に訪れ地域の人と交流している。

人が集まる場所を整える

<ケース１>
　地域にある場所を掘り起こし、クールスポット、ウォームスポットが設定されている。
　そのスポットには、公民館や図書館といった公共施設に加え、島根の自然や観光資源、温泉なども設定されている。
　スポットの一部では、モデル的に、自治会やボランティアによる催しや学習会などが開かれており、親子連れや高齢者などが集まってコミュニティが生まれている。他者との関わりを求めない人に対して個の空間も用意されており、サラリーマンなどの営業中の休憩場所ともなっている。

<ケース２>
　高齢者の移動手段として乗り合いが広まる。
　公共交通の前向きな見直しが行われる。

人工的にコンピューター上などで人間と同様の知能を実現させようという試み、あるいはそのための一連の基礎技術

企業が地域を意識する

<ケース１>
　店舗もクールスポット、ウォームスポットとして設定されており、企業の環境に配慮した活動と事業活動がリンクすることで集客のメリットが生まれ、経済の活性化にも寄与している。
　モデル的な取組みによる成果が発信されることで、スポットと、そこで催しを開く人材や団体の掘り起こしが進み、そこへ人が集まるという好循環が、県内で広く定着している

<ケース２>
　コミュニティの場所への移動には、デマンドバスやデマンドタクシーを利用する。
　AIによる無人自動走行の実証実験が進んでいる。

人が集まる場所、人を集める場所にエコの視点を

<ケース１>
　各家で空調をかけて過ごしていた人が、クールスポット、ウォームスポットに集まっている。
　クール、ウォームスポットでは、地元スーパーや企業による教室（DIY・料理など）が開かれ、参加者は自己啓発や趣味を楽しんでいる。

<ケース２>
　地域でつくられた電気を動力源とする電気デマンドバス、電気デマンドタクシーで移動している。
　無人自動走行は実証実験から実用化へと進み、高齢者が容易に出かけられる。

いま　　みらい

2017年　2018　2019　2020年　2025年　2030年

資源とエネルギー

現時点での課題

地域外から資源に頼っている。地域で自立したい

<ケース１>
　豊富なエネルギー資源はあるもののそれが活用できていない。

<ケース２>
　家庭の電力消費は、金額面からのみ意識されている。

エネルギー消費意識の向上

<ケース１>
　エネルギーの地産地消に向けて、地域では小水力発電や木を使う発電のどれが適しているかの調査が進んでいる。

<ケース２>
　「電気を買うのであれば再生エネルギー」という価値観が生まれている。家庭では太陽熱温水器や薪ストーブの有用性が認識され始めている。

”マイクログリッド”モデル事業スタート

<ケース１>
　エネルギーは、地域（自分たちで）でつくっただけ使用するというモデルが成り立っている。
　適正調査を行ったうえで、将来のマイクログリッドに向けたエネルギーの自給自足のモデル的な取組みが始まっている。

<ケース２>
　再生エネルギーから発電された電力を使うため、電気を使用することが環境負荷になるというストレスから解放されている。家庭では真空管式太陽熱温水器と高効率の給湯器との併用が始まっている。それを施工する技術者の養成が行われている。

エネルギーの地産地消で地域を豊かに

<ケース１>
　地域の恵まれた自然を生かして、小水力発電や木を使う発電の普及が進み、エネルギーは地産地消となっている。

<ケース２>
　再生エネルギーや地域でつくられたエネルギーを選び購入している。お金が地域外に流れず、エネルギーの地域内循環の仕組みができあがっている。
　真空管式太陽熱温水器の普及により、家庭での給湯にかかるエネルギー消費量が抑えられる。

大規模発電所の電力供給に頼らず、コミュニティでエネルギー供給源と消費施設を持ち地産地消を目指す、小規模なエネルギーネットワーク

平板式は外気温が低くなると効率が下がるが、真空管式太陽熱温水器は、集熱部が魔法瓶のように断熱されているので、温水が冬でも冷めない